

発行/平成元年4月15日 No.10
えひめ地域づくり研究会議
(財)愛媛県まちづくり総合センター

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 10

特 暮らしの風景 集

- かいわい
—ヨコ社会の人間関係—
／森 正康
- 町が私を呼んでいる
まちなみウォッチャー参上
／岡崎 真司
- 景観一言 ／岡田 文淑
- いえづくり・まちづくり
／白石 和子
- 水の都フォーラム'89を終えて
／松本 勝之

研究会議 News Letter

景観シンポジウム・レポート
運営委員ニューフェイストーク
地球サイズの交流

元気印 REPORT

豊遊会
21会

REPORT & MESSAGE

フードピア金沢 レポート
過疎における店おこし
100字コメント「ふるさと」
あなたのコーナー
TOWN タウンパソコン通信



かいわい

— ヨコ社会の人間関係 —

松山東雲短期大学 森 正 康

人々の日常会話から、かいわい（界限）ということばが聞かれなくなつて久しい。かつて、ある限定された地域空間をさすことばとして、ごく一般的に用いられてきた表現であつたが、すでに死語となつたのであろうか。事実、その象徴的存在でもあつた下町の日常風景も、ずいぶんと様変わりをしてきたようである。ところが一方、ある種の懐古的な響きをもつ「かいわい」の語を知らない、少なくとも具象的に理解しえない若者たちも、neighborhoodやareaといえばおおよその見当がつくであらう。

すなわち、「かいわい」ということばのイメージのなかに、私たちは、多様な社会関係を含んだヨコ方向への広がりを感じ取ることが出来る。それは、日本文化を理解するための基本的枠組の一つ

とされるタテ社会の構成原理とは異なる存在でもある。つまり、「かいわい」という限定空間を貫いて存在する構成原理の一つが、ヨコ社会の人間関係であると考えることが出来る。

去る二月末、学生たちの卒業旅行に同伴してロサンゼルスを訪れた。その折、数時間だけ学生たちを添乗員氏に寄託して、リトル東京とチャイナタウンの現状を見学



活況を呈する
チャイナタウン



日本村広場として風致保存されたリトル東京



近代的ビル街に変身したリトル東京

に行ってきた。まさに風前の灯といった前者と、いまなお膨張発展を続ける後者の差異は歴然としている。リトル東京には、すでに日本人移民の居住空間としてのかいわい性は失われ、風致保全施策によってやっとその命脈を保っているという印象は拭いきれない。それだけに、同じ東洋系移民街であるチャイナタウンの活気が、旅人の私にも相乗的に伝わってくるのであつた。そして、この差異の根底にも、やはりヨコ社会の連携性が関っているように感じられたのである。

○

ところで、人々の社会関係をヨコ方向への広がりのおかげで集団として把握するとき、現代社会はきわめて多種多様な社会集団を生み出している。そして、従来の地域社会における関係を通して見られた、全人格的ともいえる関係は弱まり、顔見知りの仲間意識に裏うちされたサークルやクラブ集団が目に見えて増加してきたようである。各種カルチャー・スクールの林立や市町村の文化協会傘下に集約されるサークル活動の多様さは、このことをよく示唆している。確かに、これら集団のグループリーダーたちが、一般市民に比較してヨコの連携性の高いことは、各種の調査結果から指摘されていることである。

例えば、東京都が昭和五六年九

月に実施した「東京の生活の実態と将来についての調査」に示された都民一般のつきあい方は、ほとんど接触がないまたは①「挨拶程度はする」といった、没交渉的な隣人関係が五〇・八%を占め、疎遠なつきあいが浮き彫りにされた。さらに、②「顔を合わせれば話をする」が三四・二%と続くが、より親密な関係である③「自宅または先方の家で話し込む」は八・五%、④「いっしょに何かしたり、どこかへ行くことがある」という日常行動の同伴者となると、五・八%に過ぎないという結果が出されている。

この傾向は、一般都民のみならず地域のサークル活動におけるリーダーとされる人々の意識のなかにも、少なからず存在する。昭和五八年一月に経済企画庁国民生活局が行った「コミュニティ形成に資する自由時間活動の構造分析調査」に同一項目が盛り込まれており、これによると①が二七・七%と一般市民よりかなり少ない。これに比べ、②が四一・八%、③

が一・二・四%と増加し、リーダーたちの近所づきあいが、一般都民よりも親しいものとなっていることが理解できる。さらには、今後の希望として、現在よりも親密度を深めたいと希求している。

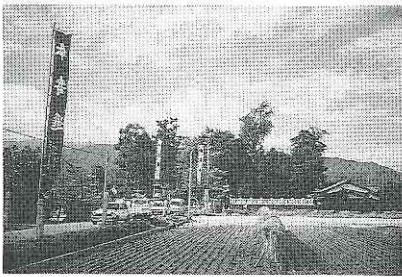
ところが、その親密さには一定の限界が存在し、もう一歩突っ込んだ関係として設定された「物やお金の貸し借りをすることがある」という、かつての下町情緒的な結びつきとなると、現状および将来の希望ともに一%に満たない。すなわち、リーダーたちの近所づきあいの親しさはあくまでも相対的なものであり、逆にいえば、かいわい性に根差した飯米や味噌の貸借を伴った同爨的なつきあい関係というものが、少なくとも現代の都市社会においては、将来をも含めてほとんど希望されていないということになる。換言すれば、個人を包摂するコミュニティを円滑に運営するためには、構成員の日常的相互関係に一定の距離を置いておくことが理想的だと考えられているといえよう。

都市化・情報化の進展するなかで、地縁や血縁から解放されて都市に集まった人々は、同時に自己の帰属集団をも見失った。その結果、自己が没個性的な個と化していくことが恐れてか、拠り所をクラブ・サークルに求める傾向が強くなったという。しかし、伝統的

ケート結果が示す限り、都市住民の結合関係はかなり表面的なものといわざるを得ない状況にある。このことの是非をいま問うにはいささか無理があるが、少なくとも理想的な社会の在り方とは思えない。もちろん、個性が集団のなかに没し去られてしまうのも問題ではあるが――。

一般に、任意参加の集団は、地縁・血縁の関係に対して一時性がその特徴とされる。したがって、地縁的には隣人関係にある人々も居住空間を離れたところでの属性は多様であり、そのことがまた、かいわい性の喪失にも拍車をかけている。

いま、各地でまちづくり運動が盛んに展開されているが、その運動主体も一つのクラブ的性格を有していることは否定できない。したがって、この運動の推進も、グループの意識がどこまで「かわいい」性とオーバースラップできるかにかかっているように思われる。



丹原町綾延神社



鎮守の森やむらの祭りも人々のかわいい性を演出する。

町が私を呼んでいる まちなみウォッチャー参上!!

愛媛路上観察友の会 岡崎直司

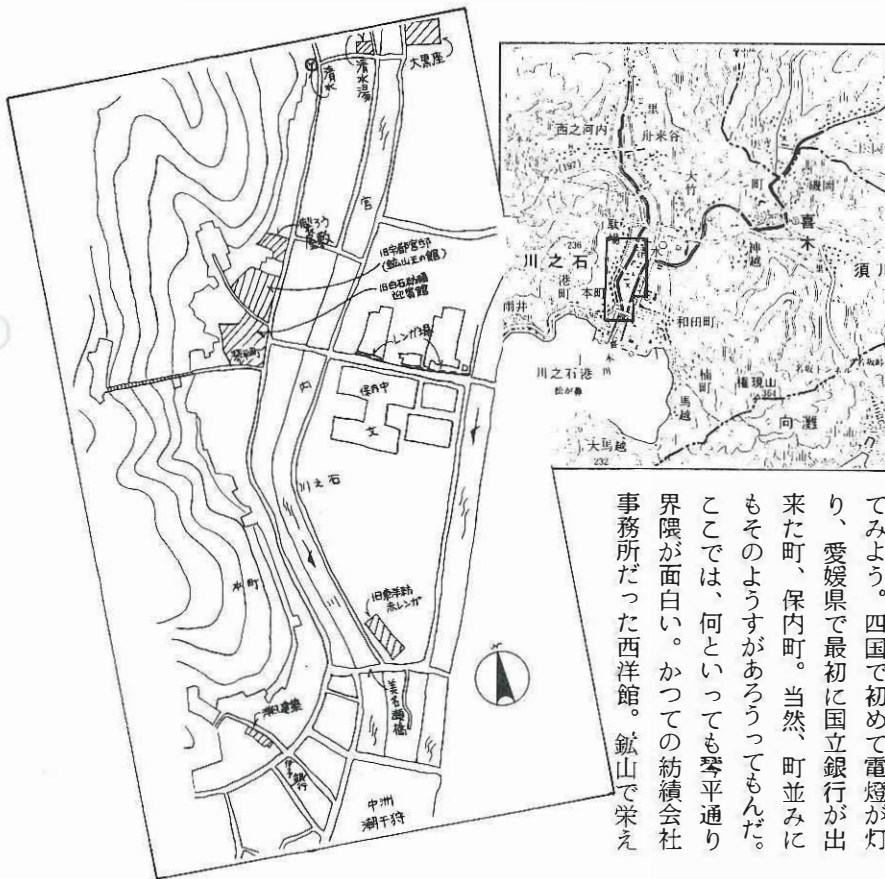


岡崎 直司 さん

私は「まちなみウォッチャー」だ、そう思っている。子供が「まちなみおっちゃんて何？」と聞くので、「おっちゃんやない、ウォッチャーやが！」と、殊更力をこめて言う。ちよっとカッコ良すぎるネーミングだが、まあ本人が気に入っているのだからしょうがない。いろんな街並を注意深く見始めだしてからもう何年になるだろう。今でこそ街並ウォッチングという言葉も、そう違和感なく耳に響くけど、そんな形容のなかったずっと以前から、私は街を眺めていた

ような気がする。恥ずかし乍ら居回数二〇数回。実は、これが私をまちなみウォッチャーにさせた正体なのだ。しかし、何も悪い事をしてその街に居られなくなったりして訳じゃない。どうやらそういう巡り合わせらしいのだ。その結果、私には強い味方が出来た。「住めば都」という言葉の味方だ。なにしろ綿密な人間関係が出来る前、おおよそ街の様子が分りかけた頃もう次の町に引越しているのだから始末が悪い。従って町を一々嫌ってたら身が持たない訳で、必然的にどこもい町だと思わくせが、知らず知らずに身につけてしまった。私にとっては、そんなところの町全てが、実は「花の都」なのだ。

いつも旅人の目で我が街我が村



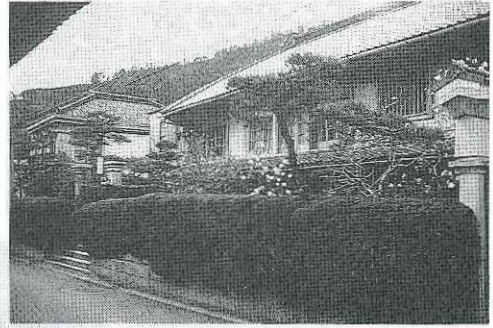
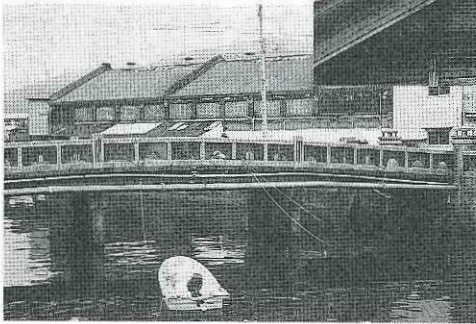
を見る事が出来れば、それは実に新鮮で感動的ですからある。街並ウォッチングとは発見の喜びだし、その事がその町を好きになるきっかけにもなり得る。当たり前前の事だけれど、自分の住んでる町の良さを出来るだけ早く、しかも他人より

も多く発見する事が、精神的な村おこしの第一歩だ。好きになれば自然と町づくりにも力コブが入る訳で、その数が多い程その町は活気に満ちてくる。

さて、私の今住んでる都、保内町をば紹介がてらウォッチングしてみよう。四国で初めて電燈が灯り、愛媛県で最初に国立銀行が出来た町、保内町。当然、町並みにもそのようすがあろうってもんだ。ここでは、何といっても琴平通り界隈が面白い。かつての紡績会社事務所だった西洋館。鉱山で栄え



▼美名瀬橋と
旧東洋紡の赤レンガ



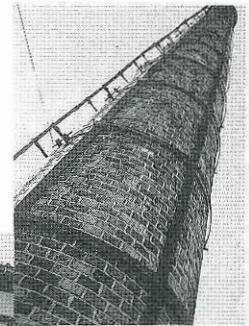
▲手前側、旧宇都宮邸と
旧白石紡績迎賓館
現在は、二宮医院と
川之石ドレスメーカー
女学院

▲ナルホド、確かに大黒座だ。
下のウサギは何だろう？

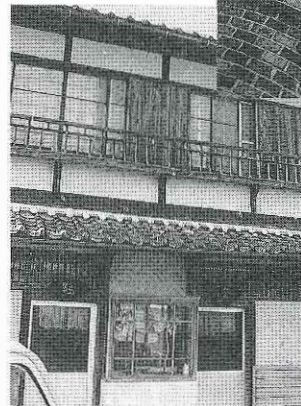
か。ずっと川沿いに下ると、レンガ造りの東洋紡績跡（今は製材所）だ。今、写真の美名瀬橋の欄干に電気を灯そうと、地元青年グループ「やんちゃクラブ」が頑張っている。この舞・たうんが出来上がる頃は、もう灯っているかも知れない。昭和八年美名瀬橋竣工当時にタイムスリップだ。

ともかく、琴平通り界隈の家々は花崗岩の切石がキチンと基礎石

四角は多いが
円形は珍しい



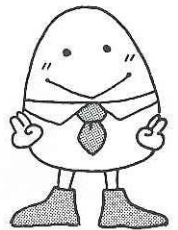
▲清水湯とレンガ煙突



に使われ、アチコチに残るレンガ塀と相まって、かつて栄えた明治の香りを色濃く漂わせている。少し海岸線に足を伸ばせば、海運業で一世を風びした雨井地区にも洋館とレンガ塀がある。こちらの基礎石は、色も大きさもそれは見事な青石だ。てな訳で、ズバリ、保内の町並を語るキーワードは、切石積みとレンガ塀。明治はこの町の為にあったのだろうか。まちなみウォッチャーの発見の旅は続く。たとえ何年か後、本当に「まちなみおっちゃん」になっていても、目だけは新鮮なままでもいいと思う。

—景観一言—

内子町 岡田文淑



近年になって、頻りと「街」とか「景観」、「風景」といった言葉が新聞や雑誌の中に見えてきた。

飽食の時代の新しい文化的息吹とでも考えたら良いのであろうか。

一般的に「まちづくり」ということが地域を語る共通の言語として位置付けられている今日、地域の個性化などと言うこともまた同じ土俵の中で語られるようになった。その中には過疎化に伴う地場産業振興に関わる話題があり、都市化現象が著しいところでは、「アメニティの創出」といった暮らしのための快適環境が論じられ、具体的な市民レベルでの行動すら起こっている。

こうした様々な今日のまちづくりの動きの中で「風景」や「景観」と言う言葉も使われはじめた。共に景色の意でしかないが、「自然」と人事とが入り混じっている様子を指している。このことは視覚的

環境として考えてもおかしくないであろう。

環境を考える中で

環境ということテーマにして、これまでストックしてきた何十冊かのスクラップ・ブックを眺めてみると、環境に対する捉え方に時代毎の大きい変化が感じられる。

一口に環境と言っても、意味することは相当に幅が広く、地域によって捉えられる事象も様々である。辞書を引いてみると「自分を取り巻く外側の状況」とか、「生活体を取り囲む周囲の状況」といったように、抽象的にしか表現されていない。従って日々の私達の暮らしに関わるあらゆる現象が「環境」で説明されることになる。

さて、私達が具体的に「環境」と言う言葉を意識し始めたのは何時の頃であろうか。何処の役所に

も「環境」を担当するセクションがある。そこでは主に「生活環境」に係わる事務が扱われ、ゴミ、下水・汚水・騒音、公害など、身の不愉快な暮らしの部分に対する事務が行われているであろう。一九六〇年代に四日市ぜんそくが蔓延し、イタイタイ病が公害として報道され、この撲滅に対して市民運動が起こったことは記憶に新しい。経済成長期の活況の裏で国民の健康が脅かされる状態の中で、改めて「環境」が意識され始めたのではないかと考える。

こうした市民自らの健康に対する意識は、「生活環境」として捉えられてきた。そしてこうした動きは、引き続き「自然破壊」への目覚めとなって自然保護運動が起こってきた。一九七〇年代のことであるが、当時の大石環境庁長官の判断で、尾瀬での自動車道の建設が中断された話は余りにも有名である。愛媛県下でも公害から自然保護へと、市民運動が拡大し、石鎚山系でのスカイライン建設、織田ヶ浜、ブナ原生林の保護など、全国的な「環境保全」の動きの中でその意識が高まっている。公害

から自然保護へと進んだ環境保全運動は、さらに歴史的環境へと意識の高揚が図られている。内子町で実施されている「歴史的な町並み保存」は、環境を考える三つ目の課題にはかならない。

ふるさと景観へ

いま「ふるさと創生」が多くの自治体の行政課題になっている。ふるさとが何かの論議はさて置くとして、地域イメージの高揚を求めた戦略づくりに懸命である。そしてその結果を行政の仕事として市民に評価されたいといった思いも相当なもので、地域間競争の一面面さえ持っているようである。景観を考える一端として、「ふるさと」↓「風景」↓「環境」は、表裏一体のものではなからうか。「ふるさと」といっても、受け止め方は様々で画一的に定義することは出来ないが、一般的には自然のあるべき姿をベースにして、そこに育まれた在りし日の環境の様をイメージする。都会は日一日と大都会へ向かって変化し、田舎の街は都会で創られた都市施設を受け入れて、近代化を満喫する。

いわゆる都市化現象であるが、山村集落ではフィジカルな受入れも儘ならず、地方都市を新しい経済と文化の圏域として人が流出していく。こうした動きの中に、景観と原風景の差が具体化してくるこ
とが判る。東京や大阪と言った大都市ですら、今日「原風景」を求めて、様々な市民運動が展開されているが、地方の都市や町には未だその動きは鈍い。一度は大都市が持つ歪みを苦い体験として味わってみたいと、新しい原風景へ向けての行動として表われないのかも知れない。

インテリアから

エクステリアへ

戦後、我々の生き様の中で感じることであるが、現在家の中には数万点におよぶ「モノ」が氾濫している。耐乏の中で生きてきた反動かも知れないが「モノ」が増えてきた事は事実である。そして今日ではその「モノ」の質を問うようになつてきた。いわゆるインテリアの質を求めているのである。戦後建てられた家が改築され、合板の家具什器が、天然物のそれに

買い替えられるようになった。単に豪華さを求めているのか、これまでの歪んだ文化に対する私的空間の見直しなのかは判らないが、飽食の時代の一つの頂点にさしかかっているようでもある。

こうしてインテリアに対しては、誰もが細心の注意を払って、家中をしつらえていくが、さてエクステリアに関してはどうか。家の内部空間に対する「美」への配慮と同様の気配りが出来るだろうか。「景観」とは地域において誰もが共有する視覚的「美」であり、地域住民の時には街の「共有財産」である。

だとすればそこには当然一定の制約の元に、景観形成のための努力すべき役割（ノルマ）があつて当然であるはずだ。しかし現実には、だれしも「美」を意識しながら、また景観の一部に加わっているが、我が家は美しく、我が家は目立ちたく、個性を競うことに神経を注ぐ。結果からすれば連続と続く街路の主要な部分を占めているにもかかわらず、「街路景観」が全く美しくならない。そこに欠けるものが調和とか、連続感といっ

たものであろうが、一方で土地利用上の無駄にも耐えなければならぬ。いずれにしても「景観を構成するモノ」大半が私的物件であり、私的物件自体の公的制約の中で、初めて成り立つ理論が「景観形成」であろう。

こうした実践事例はドイツなど西欧諸国に多く見られ、そこでは当然の義務として考えられている。例えば、「来る人に安らぎを、行く人に幸せを」とは、ローテンブルク市の城壁の門に掲げられている言葉である。そして西欧の街に入つて気付くことが、二階の窓辺に外向きにゼラニウムの花が飾られ、外来者を歓迎する心掛けを、市民の公僕として実施されている。街は自分達が暮らす場所であると同時に、来訪者を迎えるところでもある。来訪者の訪れないところは活性化が考えられないことは自明である。

イギリスにシビック・トラストという組織がある。この組織では「美を育て、醜と戦う」ことを目的にして作られている。住宅団地、工場、街路、ショッピング・センター、原っぱなど、目に見える景

観に対して「美」を求めるために、市民がお金を出し合い、「醜いものを見ない権利の確立」を図ろうとするものである。

これに対して、我が国ではどうであろう。ある外国の経済学者の弁を借りると、「日本人は、美に敏感で醜に鈍感」とのこと。不愉快なモノを見ても、「気にしない」我々の性格が直らない限り、「景観を論じる資格はないのかも知れない」。

我々はよく旅をする。旅の目的の一つが景勝地を含めて「美」を求めることである。よその町の「美」を求める割に、自分の町の「美」をないがしろにする不思議な現象はいかかなものか理解に苦しむことしばし。

最近では「我が町は美しく」のコンクールが実施されている。また、徳島県阿波町ではバーベナテネラの花を町中に咲かせ、市民運動の手法として人気を独占している。そこには市民の役割と、行政の任務がうまく分担されている。大橋架橋後の愛媛の個性化を「美的景観」からアプローチすることも「まちづくり」であろう。

いえづくり・まちづくり

ゆにて設計事務所 白石 和子



白石 和子 さん

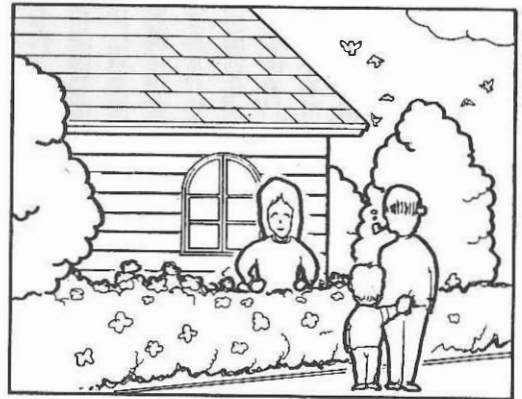
「きれいなお花ですねえ。」「勝手に見ないで下さい。」これはある所で聞いた話だが通り掛かりの人ではあってもコミュニケーションのきっかけとなるはずの言葉がこんな形で投げ返されたら何と悲しい事だろうか。

飽食の時代と言われ、タンスの中は入りきれない程の衣類で溢れて、住生活も量的には、ほぼ満たされた状態になっていると言われる現在の日本。住宅のインテリアに非常に関心が寄せられているが、ここで一歩外に出てみようではな

いか。先の会話は状況がはっきりしないと見えにくい。高齡化社会がやってきて仕事に埋没していた人達が家庭に戻る時、一番大切にしたいくなるのは家族はもちろん、隣人友人である。一人住まいはできても孤独には絶えられない。それが人間なのだから。

だれでも家を建てようとする時は大変な情熱をもちしている。自分の家そのものについては快適に暮らせる様にと、隅から隅まで気を配るが廻りの環境についても少し心を配ってあげれば皆が気持ち良く暮らす事ができるのではないだろうか。

「日当たり・風通し」の良い家にした。これはほとんどの人がま



ず挙げる条件であり毎日の生活を健康に過ごすためには基本的な事といて良い。同時に隣りの人についても言える事であるから配置計画や屋根の高さ、形を決めるに当たって考慮したいものである。さらにふとん干しが必要条件になっている日本の場合他からの眺めにも注意して貰いたいものである。どんなに素適な家であっても玄関の上にはベロンと布団が垂れ下がっていたのではがっかりする。

「眺め」これは地理的条件によるところの問題でもあるが、朝日が見えるとか、遠くの美しい山が望める様にとか。(人々の心のロケーションとして残るのはやはり大自然)、はたまた夕陽を眺めながらお風呂に浸ったりというのも何とロマンチックな事だろうか。

住宅内での「プライバシー」についての問題。伝統的には日本の住宅ではあまり重要視されることはなかった。それでも人々は生活の知恵でうまく過してきたが、西欧風生活がとり入れられてきてくる事もやはり無視する事はできない。ただ子供については基本的な処でしっかりとおさえておかないと生活が期待しない方向へ進んでしまう事にもなりかねない。また老人同居の場合も自由さや静かさ尊重のあまり、家族生活と切り離してしまうと折角の同居生活が却って淋しいものになってしまう。

周囲とのプライバシーについて

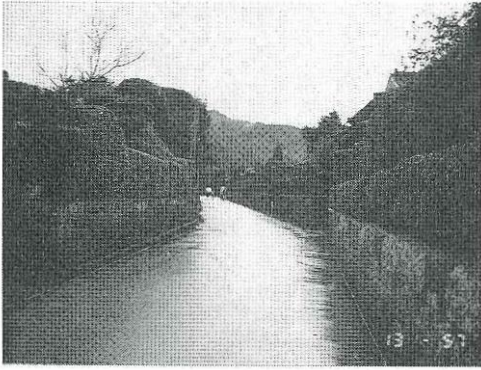
言えばこれは主に視線の問題になるかと思うが、たとえば居間で寛いでいる時に隣りの窓や通行人から覗かれるのは堪え難いし、あるいはトイレに入った時に他人の視線を感じるというのも嫌なものである。生垣をうまく利用するか居間は掃出し窓(床からの出入口)にしないで腰壁をつけておく、トイレの窓は高い位置にいたり、斜めの出窓にするなど、ちょっとした工夫でうまく処理できる。

プライバシーとも関係しているが、音の問題は、対策が困難だけに深刻である。集合住宅では、「ピアノ殺人事件」として忘れられない問題となったがそこまで極端にならないまでもしばしば社会問題として取り上げられる。特に最近ではじゅうたんがダニの発生で敬遠され、替りにフローリングが床材として好まれる様になり、問題が表面化してきている。一戸建て住宅間においてもカラオケなどの音はもちろんだが意外と気が付きにくいのがボイラーの燃焼音

やエアコンのモーター音などいわゆる低周波音の問題である。これは自宅内よりも却って隣りや離れた所からの音が気になることがあり、設置場所、遮音装置などと共に使用時間の配慮等もお互いに注意しなければならぬ。

その他「臭い」や「ごみ処理」等住宅及び町全体について、慣れてしまえば案外気にならない事から来た人に非常に嫌な印象を与えることがあるので気をつけたものである。

まちづくり、景観作りが今や真っ盛りという感じでいわれ、シンポ



ジウム等が盛んに行われている。

目的としては個性的でうるおいのある、そして感動を持って過せるような、子供達が大人になった時原風景として素晴らしい町であるように、と諸先生方のご意見もかなり出されているが、具体化段階で地域に則したきめ細かい対応を気長く考えていく以外には無い。

今や全国的に認められているような素晴らしい景観地域も安々とできたものでは決して無いのだから。建物の外観、生垣、ストリートファニチャーのデザイン、舗装、電線の中埋設化、夜景の演出照明。

大木、老木の保護(たとえ個人的な所有であってもみんなを守って行く)等々。

既存の町並みを考えて行く場合はいうに及ばず、造成地に新しい町を作っていく場合や、反対に共通の歴史的要素を持っている場合なども含めて、多くの条件の下で作られていく環境ではあるが、関係者一人一人が町作りへの「思い入れ」をもって、「こだわり」の町づくりへ積極的に協力していくこと。これが基本の条件である。

また最大の目的は人々(高齢者から子供まで)が居心地よく安心して住めるということである。いくら見た目に美しく整備された町であっても人の心のつながりの無い町では住心地の良いはずがない。視覚的にも人間的にも美しい町にしたいものである。



水の都フォーラム⁸⁹を終えて

西条市生活文化若者塾・事務局 松本 勝之

古くから「水の都」と言われてきた西条市は、ここ数年「水を活かしたまちづくり」を進めていきます。その西条市で去る2月5日に開催された「水の都フォーラム⁸⁹」について、私個人の感想も含めて紹介します。

主催者は、西条市生活文化若者塾で、この塾は昭和62年10月に県の補助を受けて県下15市町村で発足したうちの一つです。半年かけて西条市のことをいろいろ研究し、西条らしさ、西条にしかないものをテーマにしようということで、今回のフォーラムを企画しました。

フォーラムの概要

○ 基調講演 石川幹子氏

(財)日本造園学会国際委員、技術士(都市及び地方計画)の肩書を

持ち、ボストンのウォーターフロント計画など多くの事業に携わってきた先生が、スライドを使って各地の事例を紹介しながら基調講演を行いました。

その中で近代公園のコンセプトとして

- ① 牧場や田園をイメージにしている。
- ② 自然の荒々しさも表現する。
- ③ 立体交差で人と車を機能分離する。
- ④ 見せ場を演出する。(人が集まる核をつくる。)

⑤ 水と緑に文化をあわせ持つ。

の五点を指摘し、行政だけでなく、民間も土地利用規制、建物の高さや色、さらにはカーテンの色までも協定を結ぶなどして協力している海外の事例を紹介しました。

西条に対しては、百年を単位とするようなしっかりした基本計画を立てて、市内のいい所、郷土色を若者が掘り起こしてプラスαを加え、百年先に素晴らしい財産として評価されるようなまちづくりを訴えました。

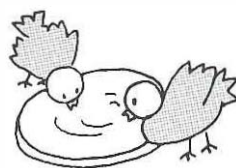
○ 事例紹介 広松 伝氏

柳川市の環境水路課長補佐の広松さんと言えはご存知の方も多いと思いますが、北原白秋のふるさと、川下りで有名な柳川の水路を見事に再生させた人です。高度成長につれてヘドロやゴミで汚れた水路を埋立てようという計画をひっくり返し、百回を越す住民との話し合い、住民と行政が一緒になって行った清掃、きれいになった水路の様子をスライドを交えて紹介しました。

○ 事例紹介 石岡 昇氏

親水公園の先駆けとして有名な江戸川区の古川公園、小松川、境川公園を手掛けた石岡さんは、都会の中に人工の自然、せせらぎを

作り出した。最初は魚を放流し、散歩を楽しむ散策道として計画したが、自然に馴染んでいた子供達から、川の中へ飛び込み遊びだしたこと、水遊びができるように水深を浅くしたり、水質管理も行うなど計画を変更した結果、多くの人に親しまれる公園となったことを紹介した。



○ 事例紹介 宮下憲三氏

西条市の生活環境部長として、現在西条市が受けている各種地域指定の紹介、市の取り組み状況などを紹介した。

○ 質疑応答

① きれいな川、美しいまちづくりを進めるうえでぶつかったカベはあるか、どうクリアしたか？

(石川) お互いの主張を全部吐出し、そこから解決が生まれる。

(広松) 心血を注ぎ、常に問題意識をもち、いい方向にもっていかうとする姿勢があればかべは無い。

(石岡) 総論賛成、各論反対という場合が多いが、住民意識を



抽出する組織整備により解決する。

(宮下) 考え方、とらえ方の違いがあり、粘り強く話し合い、理解を求めれば乗り越えられる。

② 西条には自然の海岸が全く無

いが、親水という観点から何とかならないか。

(宮下) 都市整備基本構想の中で、釣場、なぎさ、緑地を作る計画はあるが、可能性を探りながら考えていきたい。

以下、簡単に概要を紹介しましたが、フォーラムを終了して反省すべき点が数多くありました。

① 会場とのディスカッションの時間がとれなかったこと。

(事例紹介が長くなり、講師の先生の飛行機の時間との兼合いもあり、40分程しかとれなかった)

② 広く浅くという感じでもっと掘り下げた話をしたかった。

③ 質問が多く全部の質問に答えられなかった。……

水を活かしたまちづくりを進めていくうえで、今回のフォーラムを一つのきっかけ、スタート台としてみんなで考えていかなければと痛感しました。

そこで、個人的な考えですが、水を活かすとか水に親しむにはどうしたらいいかなどと、あまり大



松本 勝之 さん

げさに考えずに、まず、近所の川で魚とりをしてみませんか。

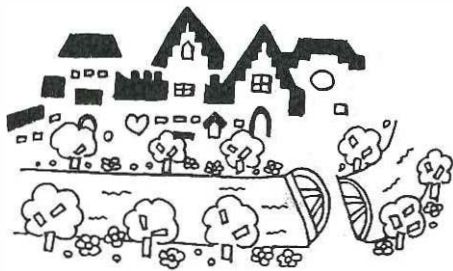
どこの町でも、川がすこしずつ川でなくなってきたつあると思います。小さい頃よく魚を探りに行った小川が三面コンクリートで覆われ、ゴミが浮かんで子供達が遊ぶ姿を見かけなくなりました。勉強や塾に追われている今の子供達と一緒に追われて、魚をとる面白さ、楽しさを体験すれば、川がより身近なものとなってみんなが観察するようになると思います。

今、一番必要なことは、川をもう一度見つめ直してみることでないでしょうか。生活排水がそのまま流れられたり、空き缶やゴミで埋もれているという現実を直視しなければならぬ時期にきて

いると思います。

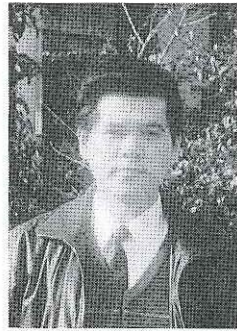
もし、自分の子供や近所の子供がそんな川で遊んでいけば、水の汚れ(特に生活排水)にも気を使い、ゴミのポイ捨ても少なくなるし、みんなが協力してヘドロをとり除けば、今ならまだ復活する川はいくらでもあると思います。

自分の子供と一緒に魚とりができるような、そんな川を21世紀に残していくために、一人ひとりがこれから考え、行動していきませんか。



「二〇〇一年このころのまちづくり」 — 景観からのまちづくり —

愛媛県建築士事務所協会会員
DOドゥー建築設計事務所 深見 兼司



深見 兼司 さん

時代は昭和から平成へと移り変わった。昨年春、瀬戸大橋が開通し、四国も新しい時代を迎える。

かえり見ると、昭和は急激な高度経済成長を成し上げた発展の時代であった。物は豊かになり、GNPは全世界のトップクラスまでのしあがった。しかし、その反面人間の心の豊かさは置きざりにされてきた様に思う。近年「アメニティ」という言葉が聞かれるようになり、「物」の時代から「心」の時代へと変わろうとしている。私達の身の回りの環境も、機能第

一主義から脱して、美しさ、快適性、うるおいといったことの実現が必要であるという認識がなされるようになった。ここ数年前から、まちづくり運動が各地で盛んになってきており、「まちづくり」に関するシンポジウムが、いたるところで展開されている。

この度、愛媛県建築士事務所協会は、「見える環境」≡「景観」から、まちづくりを考えていこうと言う事で、平成元年三月四日(土)第二回シンポジウム「二〇〇一年このころのまちづくり」— 景観からのまちづくり — が開催された。

当日は、あいにく小雨降る悪天候であったが、それにもかかわらず四国各地から多数の聴衆が参加され、会場はあふれる程の大盛況であった。これを見ても、今皆さ

んがいか「まちづくり」に関心をもっているかがうかがえる。

「景観」は、最近ようやく耳にする言葉で、山・海・川・緑・水・建物・塀・花壇・看板等あらゆるものが対象となるのは広い内容をもっている。今回のシンポジウムは、建築面から景観を考えると、この会の参加者も、行政・建築士・建設関係者等を中心に、特にまちづくりに興味ある一般市民・女性も含め、ある程度専門集団でおこなわれた中味の濃い会であった。

シンポジウムは、午後一時から始まり、まず主催者挨拶、来賓の新居浜市長挨拶の後、前半のメインである基調講演が、大阪芸術大学助教授である田端修先生よりおこなわれた。

ここで、基調講演の内容を、かいつまんで述べておきたい。

田端先生は、「景観からのまちづくり」と言う事で、次の三点について話された。

①景観整備の背景

●景観整備の考え方

●これからの景観整備への提案
まず①番目の景観整備の背景として、「視覚的騒音」と「金太郎飴的景観」が、現在の日本都市をおおっていると指摘する。

「視覚的騒音」とは、……色彩等に美的基準がないため、色とりどり、形とりどりの町ができていく。看板や広告物だけでなく、そういういった建築物全体が視覚的騒音である。

「金太郎飴的景観」とは、……個性の欠如

。町の個性がなくなっている。
。公共建築物等画一的デザイン等、どこをきいても同じであると



いう事から、「金太郎飴的景観」と名づけた。

また、景観整備とは、ただ単に都市の見え方のレベルアップにとどまらず、都市環境にうるおいを増す事とか、文化性・アメニティを高める事も含まれる。故に、景観整備の話としては、見える環境を扱うけれど、背景としては、世の中全体の社会的な基調の変化という、はば広いコンセプトがあると述べられた。

次に、②番目の景観整備の考え方として

- ・都市の美しさをつくる構造として、次の4項目をあげる。
 - (1)大きな自然：山・川・空・海等
 - (2)小さな自然：公園・街路樹等
 - (3)都市の歴史的資源
 - (4)都市の顔：駅前・めぬき通り等
- この(1)〜(4)を考えていく事が、基本的な都市景観をつくっていくストーリーになると。
- 最後に、③番目の、これからの景観整備への提案として、始めに述べた「騒音」と「金太郎飴」は、事実背反のコンセプトであるが、

この二つがうまく料理されないの良いまちづくりはできない。

また、景観に対する共通の言葉をつくっていく事が大切。まちづくりの主役である市民が中心となって、自分達の町についてどしどし発言していく事が一番であると話をむすんだ。

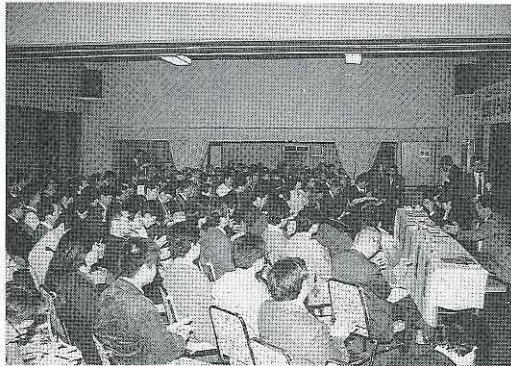
シンポジウム後半は、新居浜の写真家田尾忠士氏により、「新居浜の今・昔」のスライド上映、その後、後半メインのパネルディスカッションと進んだ。

パネルディスカッションは、パネラーに東京から、建築家田中滋夫先生・長谷川逸子先生、コーディネーターに愛大教授の柏谷増男先生と、皆さんまちづくりに大いに貢献されている諸先生方をまじえ、活発な討論がとびかき、会場と一体のディスカッションとなった。

田中先生は、今までの公共建築物を指摘。「計画・設計にもっとエネルギーをかけるべき。建物が建つほどに景観が壊れている等々」これには、参加された行政の方々も「カルチャーショック！」

また長谷川先生は、「現代は創造的、オリジナリティな考え方が不足している。もっと回りを引っぱり影響を与え続ける建築をつくる事が大切である。」

彫刻家の宮内先生は、自らの作品を通して、「感性を入れた作品は、あたたかさを感じるが、感性に訴えないものは冷たく、人も見向きもしない。景観にも感性に訴えかけるものが必要だ。」と指摘。「芸術は爆発だ！」と両手を上げて叫ぶなど終始熱気と笑いの提言であった。



会場からも、次々質問・発言がとび出し、時間延長をする程、熱気あふれるディスカッションであった。

シンポジウム終了後、先生方をまじえ懇親会が開かれ、みんな大いに交友の輪を広げた。

最後に、今回のテーマである「景観からのまちづくり」は、身の回りの事でありながら、案外取り組みにくい問題である。十年二十年先、いや百年先をみつめて、一步一步あゆんでいかなければ…。また、都会から有名な先生方をいくらか招いても、所詮アドバイスにとどまり、結局自分達の町は自分達で考えて動かなければならないのだと感じた。

この「景観からのまちづくり」シンポを二回三回と繰り返して、まちづくりの仲間の輪が広がっていき、事を大いに期待して置筆。





生名村役場

村上 寛仁

この頃思うのですが、「地域づくり」とか「村おこし」と言われるのはいったい何だろうか。どうも自分にとってしっくりしないことばです。今までは違った何か特別な活動をしなければならぬような錯覚に陥ってしまふ。

「地域づくり」の下に「研究会議」とくっついて、更にその上には「えひめ」と冠がついている。よけいに判かりにくくなってしまった。こんなことを言ったら、きっとみんなに非難されるだろうなあ…。

「地域づくりは趣味です」と話

農協中央会

高須賀忠篤

「おまえの出身はどこぞ」と問われる度に、どこにしようかととまどった。最近では「わしの古里は三つあると自慢することにしてゐる。そしてその古里は、私の人間形成と深いかわりを持っている。

◆久万町畑野川は、母の里であり私が満州へ渡る六歳までをすごした、三つ子の魂の古里でもある。

◆生死の境をさまよひ、昭和二十一年十一月に満洲から帰った。飲まず食わずのどん底生活の体験は、



すことばの裏には何を隠しているのだろうか。「何もありません」と答えられたらいいなと思っております。

極限の世界を見てきた者のずぶとさと、困った人、弱い者への涙もろさと、いたわりの心を育ててくれた。

◆社会人としてのスタートは、小田町農協の営農指導員だった。農協マンとして、誰のために何をなすべきか、その物差しを徹底的に教えてくれたのは組合員だった。

まちづくり総合センター

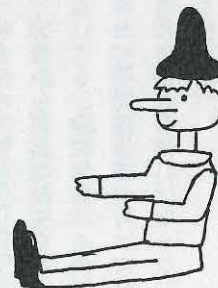
井上 謙二

夢を見るのは好きでも、その夢を実現しようとしたことがなかった私が、ひよんなことから、夢を表現することの難しさとまどうことになりました。

そして、単にそれを実現する手法といったことの前に、「何故、どういう夢を見るのか」という、夢にも根拠が必要だと気づきました。

先日、ある人から「スタートとゴールを確認すること、自分の言

「地域づくりは人づくり」にこだわり続けながら運営委員の末席をけがしたい。どうぞよろしく。



葉で理解することが基本だ」と教えられました。

この一年、現象とか方法とか、いわば枝葉の部分を知識として知ることには死にたいように思います。「何故、何のために」「最終的にどうなればいいのか」を、まづもって自分が確認することの重要性に、やっと思い至った次第です。

楽しい夢、しかも自分なりのささやかな夢の実現をめざして、体に汗して動きながら頑張りたいと思いますので、会員の皆さん、先輩の皆さん、どうか宜しくお願致します。

新居浜市役所

越智 省二

研究会議のみなさん、こんにちは、私の趣味はサイクリングとアマチュア無線です。毎年県下70市町村を走りまわっていますが、時間をかけてじっくり見たいと思う町は、外来者に対して親切に描かれた案内看板、ポケットパーク等が整備されている所です。初めから趣味の話になりましたが、私は工都新居浜市において公共建

築物の設計監理をしています。

「みち」のシンボでもこだわりました様に、銅山への道から新居浜の歴史が始まり現在は住友各社を始めとする多種多様な企業が生産活動を続けています。新居浜は地味な町、労働者の町、静かさを愛する町等々さまざまな形容が当るかと思いますが、秋の太鼓まつりにおける新居浜っ子のエネルギーには想像を絶するものがあります。行政マンとして、これからの高齢化社会を考えていく中で、やはり銅山と太鼓台にこだわりながら、新居浜のまちづくりを進めていければ幸いです。

川之江市

豊田真喜男

住んで自慢のできるまち、人に誇れるまち、そういうところに人は集まる。しかし愛媛の内外のイメージはどうであろうか。

産業と経済基盤の確立は重要なポイントだが、この発展度だけではハイアメンティのまちはつukれない。まちの文化度を量るとき三

つの点から考えることができる。

- ①文化のストックがあること、②まちの景観に文化性があること、③そのまちの発信する情報、文化の内容が高いこと。

企業の文化性、あるいは地域文化を創造することによって人間が住みこなせるまちづくりが考えら

城辺町

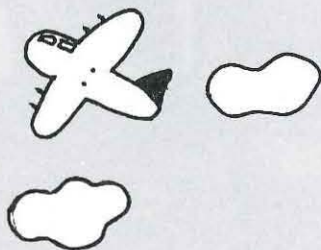
岡本 和夫

花粉症が盛りになると城辺町も春本番を迎えます。ポーと生きていると一生は、ほんの一瞬で終りそうで勿体ないからと思いついたのが人間ウォッチング。百人百様とはよく言ったもので、人は誰も皆、自分にならないものばかり持つて

いて大変興味深い存在です。そして絶えず体から言葉や動作でもって何かを発信しているのですからこちらも大いにアンテナの性能を上げて受信し分析にトライ。今のところ、ここまでで精一杯。いろんな人に出会うことが楽しくて、首をつっこんでしまいましたというのが本音で、足を引っぱらぬように、ウォッチングできればと思っています。最後に酒は日本酒党で熱燗が特に好み、ビールはトイレが近くなって面倒すぎるから駄目。何卒よろしく。

れないだろうか。

立場や価値観を異にする人が個々の主張を調整、まちの活性化のため共通の目標やビジョンを持ち、各々のまちづくりの実践からお互いの情報やノウハウを交換し、連帯感を醸成し、21世紀に向けて、よりグローバルな観点から愛媛のまちづくりを考えるヒューマンネットワークを提唱したい。



「今後の国際交流の在り方」

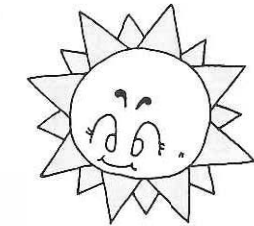


— 地球サイズの時代 —

双海町役場 若松進 一

① 心で接する国際交流

「外国へ行く。総理府（総務庁）から届いた一枚の内定通知を手にした時、青年の船を志した誰もがそう思い、誰もが感動したことだろう。私にとってもあの一瞬はつい昨日の事のように鮮烈な印象として脳裏に焼きついている。「太平洋新時代に架ける橋」をテーマに、昭和の威臨丸と銘打って建国二百年のアメリカを訪問した第十回青年の船（班長として乗船）での体験は、世界地図の真ん中に日本が無いことを確かめ、地球サイズの時代に向かって人生の羅針盤を定めることが出来た、とても素適な旅であった。



あれから十二年、事後活動とも言うべき様々な活動に参加したが、その活動を通して感じたことは、「地球サイズの時代」がやって来たという実感である。そこで日本を舞台にした「今後の青少年国際交流のあり方」を私なりに述べてみたい。

「国際交流」という言葉が今ほど素適な響きをもつて地域社会にアピールしている時代はない。今まで国家とか県レベルでしか行われなかった国際交流が、市町村や名もなき市民グループにまで、まるで草の根的に広がるう、としている。ある市では姉妹都市によって恒久的な国際交流を目指そうとしているし、ある市民グループは、エプロン掛けの気楽な気持ちで交流を楽しんでいる。こうした活動の広がりや深まりは大変結構なことであるが、外国人と交流することが見栄や一種の文化レベル的レッテルのように考

える人達が多い事もいえない事実である。それは何でも金・物で解決しようとする繁栄日本の歪みとして敵に戒めなければならぬ国際交流のマナーであろう。国際交流は、言葉・習慣、生活様式、ものの見方考え方の違うものどうしが信頼しあうことにこそ意義が

ある。いわば心のかけ橋を架け、地球サイズの平和に貢献する手段でもある。



② まず日本を知ることから始める国際交流 青少年国際交流の現場で気になるのは、交流する私たち日本人の日本の知識が非常に乏しいことである。交流はまず、自分の国の歴史や生活、文化・教育・産業・福祉等自分の国を知ることから出発する。日本人が自分の任んでいる日本を知っていることは当然だと思ふ気持ちは誰にでもあるかもしれないが、まさに灯台下暗しで、意外と知らない。国際理解は言わば日本再発見の上でのみ存在するといっても決して過言でないだろう。外国人から日本のあれやこれやを質問され、答えら

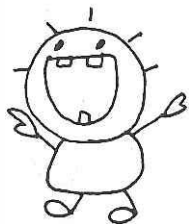
れずに右往左往する日本人の多い姿を見る
つけ外国人が堂々と 自国を語る姿に深い
動を覚えるのである。

③ 世代を越えて家族ぐるみの国際交流

外国に行くとは決まったようにホームステ
に出掛ける・ホームステイでは子供、両親
祖父母、近所までも巻き込んで行われ、ほ
ぼのとした家庭愛の姿や、国民性に触れる
とが出来るが、日本人の国際交流の形式は
英語恐怖症も重なってレセプションや交流パ
ティ等形式にこだわったものが主流で、い
ホームステイを計画しても家族の反対にあ
てなかなか家族ぐるみのお付き合いにはな
にくい。また、外国人が本望に希望してい
地方都市での交流も、受け入れ態勢が整っ
いない事を理由に進まないのは残念なこと
である。

④ 英語・外国人恐怖症脱皮の国際交流

日本人は中学三年、高校三年、大学四年と
実に一〇年もの長きにわたって英語を習っ
ている。にもかかわらず、英語をしゃべれ
る人が非常に少ない
のは何故だろう。こ
れは学校のみのも明ら
かな鎖国英語で、英
語を実学として地球



サイズの場で生かすことを想定しての英語学
習ではない。このことが真の国際理解を阻ん
だり、外国人に対して極度の恐怖症を抱く大
きな要因になっていることは間違いない事実
である。そもそも
国際交流は対等の
立場に立って交流
しなければ意味が
ない・地球サイズ
の時代に日本が果
たす役割を考えれ
ば、名ばかりの国
際交流でなく、対
等に語学等の力を
つけ謙虚な中にも
はっきりと自己主
張できる日本人でありたいものである。

⑤ 事後活動と国際交流

日本には色々な海外派遣制度があつて、今
では誰でも簡単に参加出来るようになったこ
とは大変結構なことである。こうした海外派
遣制度は、派遣によって得た貴重な海外体験
を事後活動に生かすよう求めているが、残念
ながらその域を脱していない。

現在の事後活動は参加した人達が仲良くし
ようという同好会的な性格が強く、その活動
がかえって真の事後活動を阻害しているといっ



てよい。事後活動はいつでも、どこでも、誰
でも行える大衆的なものと、いつでも、どこ
でも、誰でも行えない専門的なものがある。
国際交流事業へ参加した私たちは、この二つ
を組み合わせて活動しなければ、二十一世紀
をめざす夢とロマンに富んだ新しい国際交流
のキーワードは生まれられないだろう。



心豊かなドラマを追って

豊遊権 藤田光弘
(宇和島市)

蒔かぬ種は生えぬ、という。何事でも誰かが仕掛けないといつまでも新しいドラマは開演しない。

自分の住む地域でもなにかを仕掛けることで風通しがよくなるのではないか。そう思い豊遊権を結成しました。村おこしが全国的なブームのなかで、ひたすらまき込まれまいと孤立を頑までに守っている宇和島の中で夢物語を語るのは心苦しいのですが、わが町にもよそと同じ様に21世紀は来てくれるはずだし、その時にはまきれもなく俺たちが主役のはずです。

村おこしが地域経済の活性であるならば、ゆずにおけるそれは20数年前「漁村の灯は消えた」と言われた、あの貧困に苦しんだ時代がスタートであろう。漁協が倒産し、親は出稼ぎ、中学を卒業する

と集団就職、夜があけると隣のあととりが出てしまうたと。

自慢じゃないが宇和海村遊子は日本一の貧乏村でござると信じて疑わなかったあの時代に、真珠・ハマチの養殖を興し、全国で最初に漁業後継者組織をつくり

海のゴミを拾いましょう！
合成洗剤を追放しよう！
漁協に図書館をつくってくれ！

当時変な目で見られた活動が今は流行になった村おこしそのものである。

あれから暮しは随分豊かになりました。若者が増え、子供の泣き声が途切れません。ゴルフもやります。海外旅行にも行きます。しかし待てよ、オイお前ら今の遊子をどう思う？出てくる言葉はグチ

元気印レポート

や批判ばかり。ゆずに誇りを感じたり胸を張って生きている人は少ないようです。なぜか文化がないからです。メシを食わんがため

の厳しい戦いのなかで全ての文化的な営みを排除してきました。物

は豊かになったけれど、心は貧しくなったのが今の遊子です。

わがふるさとは天まで届くとうたわれた段々畑がござい

ます。子供の頃、イモホリの後、腰が

痛い肩が痛いとおヤツが寝床に

ついてもうめく声を聞きながら

育った自分達はその厳しさが憎

たらしいだけで、美しいとかいう感情は思ってもみませんでした。

それが養殖業の発

展とともに荒地が目立っ

てきますと、永い間大

家族の胃袋を支えてく

れた段畑に対する感謝

の気持ちと何とかした

いという気持ちが起こっ

てきました。宇和島の

市民が城を守るように、

ゆずのシンボル段畑を

みんなの手で再生できたならばと

考えます。行政を頼らず手弁当で

と思いたちはしましたが、次から

次、難問ばかりです。しかし、こ

れまた楽しみです。若者が考える文

化を村おこしを自分たちの手で実

現するという大きな夢が持てる間

は。青年団活動から15年、この道

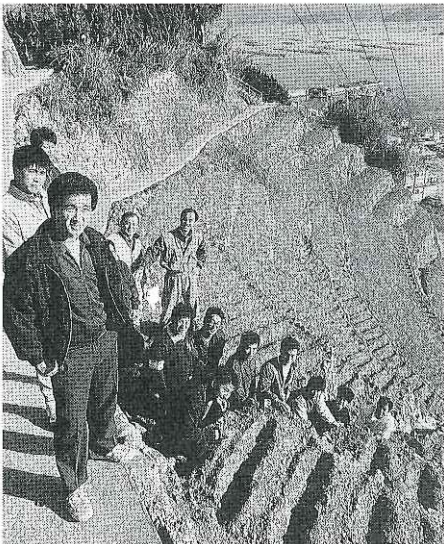
もヤクザ渡世同様仲々足が抜けま

せん。どうせ抜けないのならドッ

プリつかってやろうかとも思いま

すが、隣で寝ている子供達がふび

んでなりません。





ならない”ことに背を向けることはできない。しかし、人間ある部分ではまったく逆に”やらなくていい”ことを自由意志でやることがあっても良いのじゃないか。そうした疑問に答える一つの形として21会は発足したと言えるだろう。今年で3年目を迎える21会。正直なところ、最初もつと漠然としたものだった。『自由な雰囲気の中』、月一回程度集まって、いろいろな意見を交換したり、本を読んだり、自己研修の場としての色あいが濃かったと思う。しかし、

フレームを持たないことが、どんな話題にも突っこんで行ける、という利点をもたらしたのである。21会では毎回(月一回の定例会、必要に応じて臨時会を持つ)、その時々にもつとも話題となつていくこと、われわれ自身が、もつともやりたいことについて話しあうことにしている。

21会においては、年間計画などを最初から持つことは、タブーとなつている。年間計画が、後からついてくるのだ。戦略にしても同じで、今度はこれについて、やってみようとか誰かが言う時、『戦略』は、はるか後方にある。21会では本音の言える会だから、かつこよきは気にしない。戦略・戦術等は、やっているうちに追いついてくれば良いのだ。そして、話し合いの次は動いてみる。とにかく自分のペース(自分のできる時に、できる事を)で動いてみる。これが会員間のモットーである。

「ポリシーやストラテジーのない奴らは、ものにならん。」一本

元気印レポート

スジの通ったグループ活動をしていないと、将来への展開がない。『21会はただ自己満足をしているに過ぎないのじゃないか。』等のご意見を頂戴することも、しばしばです。

でもそこは、一つゆとりをもって、僕たちの活動を見守っていただきしたいと思います。常日頃、これだけ『やらねばならない』ことに縛られているのですから……。

「21会の時間」だけは、マイペースを保ちたいと思っています。

21会活動記録

S 62年4月「発 足」

7月「原宿展」『心におしゃれしませんか』野村にいても「東京に会える」を合言葉

東京から直送のグッズを展示即売

11月「全国の新聞紙展」(野村町文化祭に出展)

日頃、手にすることの少ない全国各地の新聞を手にとって、その中から、村おこしなり諸活動のヒントとなるものをひろってもらえれば、と機会の提供。

S 63年5月「特産品展」

野村町「ダム祭」に、特産品の店を出す。

11月「シルク展」(野村町文化祭に出展)

地元の婦人工芸グループ『まゆか』との共催。『まゆか』は、特産品のシルクを使った工芸品の製造販売をしている。町民にシルクを使った工芸品の可能性のすばらしさを見直してもらおう場の提供。

あわせて、小学生のかわいい「まゆ工芸展」も催す。

平成元年

ただいま21会では、

「坂本龍馬」脱藩ルートの新説を追っている。

食が文化が、文化を食する

フードピア金沢



● 田舎もんが何で金沢まで出かけたのか。

一九六六年の夏、私は石川県の田舎「奥能登」を歩き回った。大学の風土研究会というサークル活動での一週間くらいの旅だったように記憶している。その時、金沢は乗り継ぎ駅であり、別名兼六園という通過点であった。風土とは何なのかと和辻哲郎をかじりながらの勉強会、田舎もんの田舎研究、それでも真面目に事前研究会を重ねた。輪島塗(能州もの)、朝市、海士町・船倉島、アエノコト、時国

家、祿剛崎を経て恋路海岸あたりまでバスを利用しながらよく歩いたものだ。船倉島までの船上は半分くらい船酔いとなってしまった。産業班となった私は用意したアンケート用紙を持って戸別訪問を続けたものだ。とは言いながら所詮、田舎もんの田舎訪問、出稼ぎ、

後継者、嫁、観光など暗い話とありがちだった。それでも曾々木の農家のおばちゃんなどには海人、

船人の血が流れているのか、飄飄とした強さが感じられた。農業科がある珠州飯田高校はビニールハウスの中でメロンが実を結んでおり、作業着姿の女生徒たちの顔が明るかった。船倉島の岩の上でも小学生だったか中学生だったか定かでないが、色々なことを馴れ馴れしく話してくれた。

● それから二十数年、奥能登という言い方は古く、電波に乗ってはいって行く「能登、能登半島、船倉島」が懐かしい。また、私の近くには能州ものの素晴らしい椀や鉢、それに膳をたくさん持っている農家があり、ハレの日には手料理とともにお座敷は盛り上がり、家主の自慢話ともあいまって「能州談議」に花が咲く。その昔、家

主若かりし時、醤油づくりの職人として奉公していた店からお分けいただいたものらしい。そういう器に接するにつけ、漁撈民とか中世史の話や聞くにつけ、能登が身近に感じられる。

● さて、フードピア金沢。「誘われ旅」にヒョイヒョイと乗って企画室を訪ねたのは一九八七年の四月下旬。「まちづくり」についてもかなり厳しい、しかも過激な話で頭を叩かれた。アドバイスは最後まで面倒をみるのだとか、活性化なるものの定義ができるのか、とか。それでも、中村草田男の話が出たりすると考え込んだ頭もどうにかホッと

した。そうするうちに夕刻ともなり、二人は街でお酒をご馳走になった。今考えてみると街のお店に腰を掛けるとき初めて金沢のヒト出島二郎との出会いがあったと言えるのかも知



れない。仕事で出会ってもヒトがいなかったら「情」ある出会いとはならない。彼にしてみれば二人を肴に好きなサケが飲みたくなっただのかも知れない。

そういう出会いがあつて出島さんには同じ年の秋、愛媛においでいただいた。この時も「これから先はおカネをもらってないからしゃべらない。」という容赦のない名言を飛ばしたのである。愛媛まで来てそう怒るなど、また四月の約束でもあつて、川ガニをご馳走したら、大変喜んでいただいた。

● この二月、本祭りということでもフードピア金沢の実験祭に出向いてみた。暖冬とかで雪はなくスパイクタイヤの砂埃が目にも痛い街だった。何もなければ「何が雪吊りだ」と返してやりたかった。さすが食とか地球を問う思考空間だけあつて雪がなくてもメニューは揃っていた。

◆ フードピアセミナー・CI戦
略！変革への挑戦！

地方都市における六日間という短期間のイベントの中で、しかもそのイベントを支えている若い企業人を集めて丸一日学習会をしようというのだから敵はない。アドバイザー（出島二郎）から「都市の文化と企業の文化とを統合する表現活動としてこのフードピア金沢が位置づけられる。地方都市は大都市にくらべて都市と企業がより濃密な関係にある都市と言える。本日本日おいでいただきたい講師の方々は一線で活躍されており、素晴らしいお話がいただけることと確信する。今日一日しっかり勉強してほしい。」と趣旨説明があった。

電通東京本社CI室長・岡田芳郎、ワコール宣伝部長・三田村和彦、ミノルタカメラ広報課長・東俊雄の各氏からのおいしいプレゼントはこうだった。Iはもともと個人の問題、無数のコミュニケーションの総和がCI。商品の魅力は流れ、企業の魅力は蓄積される。

このフロアとストックで勝負する。CIは実践、毎日がCI。暗中模索の挑戦それがCI。議論して議論して結論を導く、言ってみればなぐり合い。会社も「徳」がなければ続かない。

◆ 食 談

浅野川大橋や泉鏡花ゆかりの地も近い料亭まつ本がその夜の会場、「風土」のれんぞくつて玄関に入り、トイレをかりて考えた。金沢というまちと素材の良さがベースではあるが、フードピ



ア金沢がまち・ヒト・モノや店を鍛えているなあ。逆もあるなあ、鍛え合いだなあ。

食談の前段はあの上野千鶴子さんとニューアカデミズムの旗手浅田彰氏の掛け合いトーク。厳しい話があったり、「東京」や一点蒙

華主義のイベントの悪口を言ってフードピア金沢を持ち上げたり。

場所を移してのアンコウ鍋。炭火が時間をかけてゆっくりと仕上げられる。若き店主から店と料理の説明がきちんとある。大島の着流しの男性がいて、どんな先生かと思ったら百万石の

県職員。若き浅田氏、近寄り難くもお話すれば、松山に住んだこともあって番町小学校に何年か通った、いいまちですねえ、と言われてホッとする。

◆ パーティ

その日の食談が終わってほとんどの講師が一堂に会しパーティが始まる。もてなしに甘えて私も参加。フードピア金沢自慢の面々がそれぞれに場所を得ている。金沢まで来て竺寛曉氏（金沢

工大）や望月照彦氏（都市プランナー・多摩大）から愛媛の話聞いたたりすると自分の無知が情けない。青年会議所の福光松太郎氏や

本省から出向の県商工課長宮崎修二氏などから主催団体のチームワークを誇らしげに聞かされると、「マイツタ」としか言いようがない。おいしい時間に日の替わるのを忘れさせられていた。

◆ フードピアランド・ぶらりま
ちかど

食談での話じゃないが、フードピアランドは一点豪華主義の地方博イメーじとはちがって日常的なものがベースとなっており、「文化は日常的なものの総称なんだ」と言わんばかり。武家屋敷、加賀友禅の彩筆庵へと歩きながら、「フードピア金沢よ何処に居るんだ」というほど普段着のまちかど。時代への慎重な対応、プロデューサーたちのデリカシー、本祭りの段階にはいったフードピア金沢の息の長い実験に注目することしよう。

（まちづくり総合センター）
宮本 清幸

過疎における

店おこし

中島町

俊成 満

○私と出雲神吉先生との出会い

四年前中島町におこし実践大学の講師として来島されたのが、出雲先生と私の最初の出会いです。そこで先生に自分が知らない事をまず知り、そして習うことを教えていただきました。村おこしも店おこしもそうです。村おこしとは何か、店おこしとはどうするのか。中島町の場合、出雲先生を師事し教わったことを忠実に言い、みんなが組織になることによって、トライアスロン中島大会は成功しました。

草野球にはコーチはいりません。楽しく野球をすればよいのです。プロ野球にはコーチがいます。そして大企業はコンサルタントの先生がいて伸び続けています。個人

企業は自分で考えるから、いつまでたっても個人企業です。まず正しい先生に師事し勉強することの大切さを痛感しております。

○私の実践した店おこし

私をはじめ駐車場を作らないと、これ以上売上げは伸びないと思っていました。が、先生にそれを話すと、店に魅力がなければ駐車場があっても人は来ない。店に魅力があればなくても人が来る。まず魅力をつけて人を呼び、売上げをつくってその利益の還元で駐車場を作れと言われました。その言葉でこの先生にならと思ったのです。さっそく物余り時代のソフト活用のお店作りをはじめました。

松山に明屋書店があります。楽しい店作り、ポップのすばらしさは日本一です。先生に同行してその店作りを勉強しました。今、フレンドショップは春を彩る桃色のポップのたれびらで季節感をだし、床にはポップや楽しいマンガ、足跡やストップマークをはりつけております。店の入口には昔ながらの黒板で新しい商品の紹介、レジ

横のボードには売り出しの案内や村おこし実践大学最新ニュースの張り出し、音楽においては売り出し日はチンドン屋のテープ、普段は一番人気のある演歌のテープ、売り出し日は真赤のハッピーの着用などで、お客様の五感に訴える店に変身していきました。奥のガラスにはボードをうちつけ、お客様の習字展や絵画展もできるようにしました。

商品の仕入れでは、日用品が日本最大の問屋(株)バルタックに変わりました。そのことで中島ではフレンドしか売れない高級シャンプー等を育てていけるようになりました。雑貨については東京の年商一二〇億の(株)ジャストと、こちらからの熱意で取引が出来るようになり、百円雑貨の特売もできるようになりました。四国一の有名陶器店くまもと陶器の取次、生花では丸美生花店との取次によって今まで中島で不便を感じていた商品と



季節によって
ディスプレイも
変わります。

の出会いを、演出できるようになりました。

○今年の経営方針

今年のフレンド経営方針は「問屋心は親心」ということです。問屋さんにとって商品は生きている大事な子供のようなものです。親は子を大切に思い扱います。その大切に思う気持ちによって、仕入方、売り方を学ぶのです。問屋さんはフレンドショップにとって、もっとも大切にするべき親です。

その商品を大切に思う気持ちから商品の下には、すべてスタレを敷いております。出来る商品のラッピングもしています。商品を大切



▶ 俊成 満さん

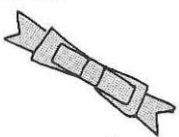


に思う気持ちはお客様に必ずわかってもらえます。

○私の生きがい、働きがい

今の私の生きがいは、両親に鷹が鷹を生んだと喜ばれる生き方です。そして両親が開店した食品雑貨を、個人店から企業にし、そのことであるさと中島町の創生に役立ちたいと思っております。子供に両親のようになりたいと言わせる生き方が生きがいなのです。

生みの恩より育ての恩を知る働きを働きたいと思っております。師事のない人生は脱皮の出来ない人生だと思えます。脱皮の出来ない蛇は死ぬ。時代が止まることはない。出雲神吉先生に学ぶことにより、常にその時代で働き、家族や社会に奉仕したいものです。



まちづくり総合センター

人事消息

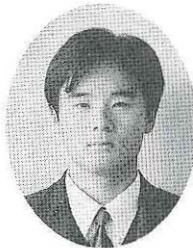
※研究員

豊田 渉
(中島町役場)



※研究員

石川 元英
(川之江市役所)



● 三月三十一日付けで活動の拠

点が少しかかりました。戦列からはずれないように頑張ろうと考えてます。よろしく。()は活動先です。

※研究員

宮本 清幸
(津島町役場)

※研究員

近藤 誠
(東予市役所)



▲ 昭和63年度 センター職員

(上段、左から) 幸地・近藤・宮本・山本・井上
(下段、左から) 久保田・宮本所長・丹下

ふるさととは原風景を言う。場所と心への刻印がその要素であろう。幼年のときもあろうし、老年のときもある。それは必ずしも実在する必要はない、ある時はトレ―ダー分岐点、ある時はマルローのカンボジア空想の広がりは実在する。

五十崎町つくりシンプの会

亀岡 徹

都会にいて、いつも思うは、愛するふるさと。満員の乗り物で立ちづくめでも心躍らせて帰ったふるさと。その、ふるさと河辺で今、村づくりに取り組む毎日、都会の人達に母の胸の様な心のふるさと河辺を造りたい。

河辺村役場

梅木 良照

たまにいてころやすらぎ
いつもいてころやすまるところ



まぶつくり総合センター

久保田 ひとみ

△ふるさと▽

情性であることも含めて、思わずそこに手が行ってしまうのです。理屈では言い難い親しみのある温もりが、そこにはあるのです。時には、ピシヤリと打たれる事もあるのですが、私の手はついそこへと出向いて行くのです。

サムシング／ジ・アース編集長

忽那 修徳

私にとつての「ふるさと」

生まれ育った場所がふるさとなら、それは「松山」。仕事・恋・結婚・育児・離婚と、自分流の生き方を刻んだ土地は「パーシニア州」。萌黄色に躍動するシェナンドアの丘を想う時、抽象的ではないふるさとの中に生きた『私』が帰ってくる。

鯛バツフォ・文化事業室長

ヘロン久保田雅子

100字コメント
ふるさと

** あなたのコーナー **

◆ 情報センサーを 広げよう農協マン！

愛媛県信用農協連

井口 浩志

当誌の八・九号に「モンドラゴンを訪ねて」というスペインの協同組合の情報が掲載されていたが、私の職業柄興味深く読ませていただいた。

その中で、モンドラゴン協同組合の生みの親であるアリエタ神父の言葉へ閉鎖された自由の中でも、自分を発見し、発揮する~~が~~が目を引いた。

この言葉を、私自身を含め、農林業の衰退や過疎・高齢化に悩む地域の農協マンに投げかけてみたい。

国土庁は、昭和六十二年度の過疎白書の中で「過疎地域の人口減少率は、昭和六十五年以降急速に悪化し、同地域の人口は、昭和六十年から八十年の二〇年間に約百六十万人(二〇%)減少する」と推定している。空恐ろしい数字である。

こういう地域の基幹産業は、農

林漁業であり、地域の経済を左右するのは、農協と言っても過言ではない。地域と農協の盛衰は表裏一体なのである。

先日、農協関係職員が集まって、農業の衰退や過疎・高齢化に農協はどう取り組んでいくかを話し合ったことがある。確かに悩んではいない様子だったが、これといった考えや取組は聞かれなかった。

大分県の大山町農協や下郷農協、そして島根県の東伯町農協などは、二十年・三十年かけて見事に地域産業(一次〜三次)を確立し、過疎を克服している。この役職員や農業者は、日本中のみならず各国を歩き回り、あらゆる業種の人々と出会い、情報を集め、それを活かす知恵を身に付けている。そして、今もそれは続いている。

『閉鎖された自由の中でも、自分を発見し、発揮する』という言葉は、過疎地域の農協マンにとって非常に重要な啓示であり、そうするためにはもっと自分の情報センサーをみがき、広げる必要があると考えるが如何であろうか。

** あなたのコーナー **

◆ 「人間的ネットワーク」 キングづくりにも一役

玉川町役場

井出サツミ

「地域づくりに関心をもつ方々へ」と、えひめ地域づくり研究会議発起人からご案内をいただいでから早や二年になる。

現在、えひめ地域づくり研究会議運営委員の若松先生や讃岐先生から聞き及んでいたこともあって即、入会した私である。

この会は、各地の知恵と勇気を交流し合い、それぞれの人や地域の活動を創造してゆこうというよびかけで、昭和六十二年十一月地域の有志活動者が集まり設立総会を開催し、発足させた。

その一員に加えさせていただいているお陰で、舞・たうんが届けられるお陰で、地域づくり研究会議の事業内容、地域づくりの活動状況、シンポジウム・フォーラムのご案内など、県下のあらゆる情報の提供と、まだ一度もお逢いしたことのない仲間からのユニークな

提言をいただいている。

特に、「地域づくりは人なり」の思いで綴っているところのようなづいている私である。なぜなら、地域づくりは、仕掛け人を要するし、その活動者の情熱によって、その地域を生き生きとさせている事例がいくつもある。

また、横の組織として、つながりを大切にしてゆこうと、センター職員の皆様のサービスピ精神と情熱で以て「人間的ネットワークキング」づくりに取り組まれ、諸々の事業が着実に展開されていることにも感動している。

この隔月発行の「舞・たうん」誌、今回で十号にもなる。表紙は毎号の特集タイトルとマッチしたさし絵をカラーで登場させ、愛読者を楽しませてくれる。

各地の知恵と元気を持つ仲間から発進してくれる便りを有難く受けて、私が携わっている社会教育分野で活用させていただき、人づくりへの精進と、自分自身がやる気とアイデアを出して、よりよい「ふるさと創生」に心掛けたい。

パソコン通信って、ほんとに便利!!

いつでも、まちづくり総合センターの週刊予定表が見れるし、各地で開催されてるフォーラムなどのレポートを読むことができるからね。
(1会員の声)

そうなんです。2月1日から本格的に運営を始めた、まちづくセンターの各コーナーが順調に滑りだしています。今回は、まず「まちづくりサロン」(コーナー番号 102)をウォッチングしてみましょう。

さっそくマネージャーの井上 謙二さんがオープニング・メッセージを入れています。

176 井上謙二 (0701) 6行 1983/12/01 09:05 35回

始めまして。新コーナー「まちづくりサロン」を、今日、2月1日から開設します。今や全室空いて「まちづくり・むらみこし」が言われるようになり、その盛り込みもさることながら、それぞれの地域、それぞれの人により考え方も様々です。

このコーナーは、全室の「地域づくり」に興味深々の皆さんが、気軽に「地域づくり」について語りあえる「サロン」としてご利用下さい。話題は「地域づくり」に関する(と

思われる?)ことなら何でも結構です。

あわよくば・・・全国の皆さんの情報交換、ネットワークが広がることを期待しています。もちろん、愛媛県内の皆さんの生活も楽しみにしています。

運営は10:70の井上く耐・愛媛県まちづくり総合センター勤務>があたりますが何分初心者です。不手際も多いとおもいますが、長く、楽しく、お付き合下さい。
<松山市・井上>

そして、センター職員
の山本さん、幸地さんが
次々と自己紹介を兼ねて
情報提供。

120 山本幹男 (07031) 68行 1983/12/07 18:26 34回

センターのミッキーです。

2月に始まった「まちづくりサロン」いかがでしょうか。ご意見ください。

さて、4日、新居浜市で行なわれた「生活文化フォーラム」に行ってきました。そこで、巴経新聞の亀地 宏さんの講演を聞きました。その概要をご紹介します。

⋮

宮本所長も、どれどれ
始まったかと、矢幡治美
先生のお話を1つ。

130 幸地真一 (0702) 31行 1983/12/23 19:11 28回

こんにちは!少し(かなり?)出遅れた まちセンの幸地です。初回ですので私の近況をひとつ。

2月10~12日、金沢へいってきました。お目当ては「フードピア金沢」でしたが、いく途中で滋賀県長浜市の「長浜・楽市」と高月町、高月地区にある「高月舟州庵」に立ち寄りました。

長浜・楽市は-----

⋮

186 宮本俊一、 (0100) 55行 1983/12/13 16:14 30回

『人間サイズ農業』の懐かしい風景に...

いきなり、「カネとヒマとアソビづくりが、まちづくりの基本路線です」といわれ、思わず「エッ!遊びが...」と、罵り直しそうになりました。昭和29年から昨年まで、35年近くも農器の組合長をつとめられ、あの山原のムラ「大山町」(大分県)を、「おおよま独立屋」と呼ばれるまでに築かれた、矢幡治美先生のお話です。

⋮

次々と、提供されるまちづくりセンターからの情報はシロウト目の私にも新鮮そのものです。

次回は、「ルポあの町この村」(マネージャ:幸地 慎一氏)と「まちづくり情報Q&A」(マネージャ:山本 幹男氏)をウォッチング!!

※ 今回から、このページを「TOWNタウン」のまちづくりセンターのコーナーとクロスオーバーさせていきたいと思ひます。ご意見や提供したい情報があれば、当センターまで手紙又はFAXをお願いします。センターの職員が代行入力を行い、「TOWNタウン」上に載せます。

Town タウン

パソコン通信ネットワーク

広げましょう
ヒューマン
ネットワーク

Vol. 6

Human Communication & Network

ECCC

Ehime
Computer
Communication
Club

えひめコンピュータコミュニケーションクラブ



まちづくり活動の情報誌として、この「舞・たうん」を隔月で発行しております。

皆様からのレター通信誌として活用下されば幸いです。

今回、中島町の俊成満さんから投稿があり、さっそく採用させていただきました。皆様もどしどしご投稿下さいね。また、内容についてのご意見や、感想なども気楽にお寄せ下さい。お待ちしております。

次回「舞・たうん」特集は

“地域・かかわり”です。

「舞・たうん」編集係

二人のM.s. (丹下・久保田)まで。

〒七九〇 松山市道後一万一の二
愛媛県まちづくり総合センター

TEL 〇八九九(二五)五五五七

FAX 〇八九九(二五)六六八〇